

I - 3 壓穴遺構・2区SK-96土坑・2区SK-98土坑・2区SK-145土坑・2区SX-2遺構)がある。なお、2a層・2b層の下層で検出遺構のうち、ロクロ土師器の出土していない遺構(2区SK-101・103・104・105・145土坑)については、平安時代以前に遡る可能性がある。

①古墳時代

古墳時代の遺構のうち2区SX-3遺構からは前期と中期の遺物が混在して出土し、2区SK-147土坑からは後期の遺物が出土している。

前述したように、SX-3遺構は、旧河道が埋りきらない状態の凹地に堆積したと解釈される。この凹地以外に古墳時代前・中期の明確な遺構については明らかでない。また、古墳時代後期の土師器を出土した遺構は、2区SK-147土坑だけで、他にこの時期に位置付けられる遺構もなく、遺物は出土しているものの、古墳時代を通じて遺跡の実態は不明である。

②奈良・平安時代

奈良時代の遺構遺物については明らかでない。

2a層または2b層除去後の3層上面で検出された遺構で、ロクロ土師器を出土した1区SD-41溝跡・1区SX-4遺構・2区SK-96土坑・2区SK-98土坑・2区SK-145土坑・2区SX-2遺構は平安時代以降の遺構と考えられる。また、2b層中で検出された遺構のうち、2区SI-1壓穴住居跡・2区SK-54土坑・2区壁面2b層出土一括土器群は、出土遺物から平安時代のものと考えられ、前述したように9世紀後半から10世紀後半の時期に相当している。

平安時代も9世紀後半以降になると、SK-54土坑などからまとまった土器が出土するようになり、当該地にも集落が形成された可能性が高い。10世紀前半から中葉に位置付けられるSI-1壓穴住居跡からは、カマドに関係すると推定される焼土面が検出され、その周辺や付属する土坑内から土師器が出土している。平安時代の集落は、2区西壁2b層出土一括土器群から、10世紀の後半まで継続された可能性が高い。

以上のように平安時代の集落は、9世紀後半から10世紀後半にわたっており、壓穴住居跡・溝跡・土坑などの遺構が検出されているが、遺構の密度はそれほど高くない。

2 中世の遺構

出土した遺物等から、中世と考えられる遺構は、第78図のとおり掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・土坑がある。これらの遺構には、重複や同一遺構の掘り返し(2区SD-25溝跡等)があるので、数次期の変遷があると思われるが、比較できる遺物が少ないので、詳細は不明である。中世とした掘立柱建物跡以外にも、建物を想定した遺構や、建物を組めなかった柱穴及び遺物の出土していない土坑のいくつかは、この時期の遺構となるものと考えられる。

中・近世を通じて、掘立柱建物跡や溝跡の方向は、真東西を基準とすると20~30°振れ、七北田川の流路と平行する方向性を示している。

溝跡には、大型(SD-29溝跡)・中型(SD-12・25溝跡)・小型(SD-2・5・10・17・19溝跡)があり、大型・中型の溝は、屋敷地の区画に係わる溝と考えらる。特に2区の南東端部で検出された大型のSD-29溝跡は、幅6m以上で深さが現地表から1.8mの規模があり、この溝に区画された主体部分が、今回の調査区外(1・2区の東部)であった場合、この溝の規模に見合った遺構・遺物が存在している可能性がある。

出土した陶器・磁器を観察すると、13世紀から14世紀頃のものがほとんどであるので、中世の遺構の時期も概ねこの年代に相当するものと判断される。

なお、中世の岩切周辺の状況に関する文献のひとつ、弘安八年(1285年)の留守家広譲状に、

『 (譲 渡)
ゆつりわたす
 (宮城) (郡) (冠屋) (市場) (在家) (紀)
 一 ミやきのこおりかふりやのいちはのさいけ」参宇内、き二郎太郎在家壱宇在脇在家、壱宇」十郎在家壱宇
 (北町) (跡) (南)
 きたまち、こさう入道かあ」とのさいけ壱宇ミなミ (中略)
 (河原宿) (市場) (字)
 一 かわらすぐ五日いちハのさいけ五うか内、一う」大池小三郎か在家、壱うさいほうかさいけ、(後略) 』

とあることから、宮城郡に「冠屋市場」と「河原宿五日市場」が存在したことが知られており、その所在地については、冠川（七北田川）の北岸の若宮前から洞ノ口地区及び南岸の今市・鴻ノ巣地区付近に想定されている（注1）。しかしながら、今回の調査では、書状の時期に当たる遺構や遺物が発見されてはいるが、今市遺跡が「市場」の所在地であるのか、中世集落の一部にあたるのか判断できる資料を得たとは言い難い。調査地点の状況は、遺構の密度と構成及び遺物の種類や量の点において、一般的な市場のイメージからすると貧弱なように思われる。市場の所在地については、今市遺跡及び周辺遺跡の調査の進展を待ち、他遺跡とも比較しながら、さらに検討すべき課題である。

3 近世の遺構

近世の遺物が出土した遺構と、その遺構と共に通する方向性からこの時期に位置付けたものには、掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・土坑がある。中世に比べると遺構の密度は少なくなる。この時期の遺構は、中世に比べて、東西の方向をみると西側が北に東側が南に寄る傾向が認められる。遺構の年代は、岸窯系壺を出土した1区SK-39土坑が17世紀頃、他は大堀相馬系の碗や肥前の磁器等から18世紀代または重複関係からこれ以前の遺構と考えられる。

以上のように、今市遺跡における今回の調査地点は、古墳時代は若干の遺構と赤彩土師器のような特徴のある遺物が出土しているが、鴻ノ巣遺跡など周辺に同期の遺跡があるにもかかわらず、実態は不明である。集落が形成されるのは9世紀後半以降になってからであるが、なおこの段階では、住居跡の密度は低く、散村的な景観が10世紀の後半まで継続したと推定される。

11～12世紀の状況は不明であるが、2a層・2b層の状況から耕地として利用されていた可能性が考えられる。13～14世紀になると掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・土坑などの遺構群によって構成される集落が形成されるが、これが農耕集落か「市場」に係わる集落なのかは今後の検討課題である。

15～16世紀の状況は再び不明になる。17世紀代についても遺物が少なく、集落が再形成され始めたのかどうか実態は明らかでない。

18世紀になって、掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・土坑を伴う集落が形成される。この時点の掘立柱建物跡には規模の大きなものがあり、井戸には凝灰岩の切石の井戸枠が設置され、井戸内から揃いの漆塗り椀が出土するなど、富裕層の存在を伺わせる。